

令和元年6月26日現在

機関番号：34440

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02426

研究課題名(和文) 野上弥生子『台湾』及び台湾関連日本近代文学の史的・文学的価値に関する複層的研究

研究課題名(英文) Multi-layered study of Yaeko Nogami's Taiwan and modern Japanese literature on Taiwan as historical and literary material

研究代表者

渡邊 ルリ (WATANABE, RURI)

東大阪大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：90263417

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：1935年に台湾を訪問した野上弥生子の紀行文『台湾』を中心とする日本統治期台湾関連の日本語文献について、日本及び台湾の文献調査、現地調査、大武・花蓮にて弥生子が面会した人物の家族への聞き取り調査により、史的価値と文学的価値の意味づけを行った。特に理蕃政策下における台湾原住民族において、「霧社事件から5年後の霧社」「パイワン族頭目カヤマの一族」「施政四十年博覧会及び記念事業」等、『台湾』の記述内容を同時代文献と比較し、日本人作家の視座に見る限定性と独自性を論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、日本統治期台湾における官憲側からの情報・それを踏まえた理蕃政策の内容について、国内外の文献と原住民側への聞き取り調査によって検証した。第二に、日本統治期台湾関連の日本語作品に関して、認識に限定性をもつ日本人作家が、統治側の意図を超えて原住民族知識人の生と内面を描出したことに文学的意義を捉え、作品構造および文学的表現を通じてあらわれる台湾認識を再評価した。第三に、霧社事件関連をはじめ、1930年代の台湾原住民及び理蕃政策に関わる記事に関し、国内外のデータベース・図書館所蔵文献の調査を行った。

研究成果の概要(英文)：I evaluated Japanese literature on Taiwan in the Japanese colonial period from a historical and literary point of view. My data centered mainly on the travel book Taiwan by Yaeko Nogami, who visited the island in 1935; I conducted a study of Japanese and Taiwanese literature, a field survey, and interviews with the families of people who Yaeko met in Daibu village (today Dawu township) and Karen (today part of Hualien County). I compared the representations of Taiwanese indigenous people in contemporary literature, under the Riban policy in particular, with the descriptions in Taiwan, including the situation in Musha five years after the Musha incident, Kayama clan, the chief clan of the Paiwan tribe, and an exposition to commemorate 40 years of administration, discussing the limitations and uniqueness of the perspective of Japanese writers.

研究分野：日本近代文学

キーワード：野上弥生子 台湾 原住民 理蕃政策 植民地 1935年 始政40周年記念台湾博覧会 霧社事件

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 日本統治下の台湾に関する日本文学の研究は、黄英哲氏、藤井省三氏、河原功氏、下村作次郎氏、垂水知恵氏等によって、台湾・日本の双方から既にその成果が重ねられており、佐藤春夫、中村地平、西川満、濱田隼雄、川合三良、坂口禰子、真杉静枝等、日本人作家の台湾認識に関する数多くの研究論文を確認できる。しかし、野上弥生子『台湾』(1942・8『朝鮮・台湾・海南諸島』所収)は、霧社事件5年後の霧社の見聞「花蓮でのタイヤル族舞踊見学と歌謡の記録」「花蓮でのアミ族・大武でのパイワン族公学校教師との面談」「阿里山登山」等、1935年時点の日本統治下の原住民政策や台湾観光に関わる重要な事項を記録しているにも関わらず現在も再評価されておらず、蜂矢宣朗氏、石月静恵氏、邱若山氏等によって、作品の特定の一部が論じられているのみであった。台湾東呉大学における蜂矢宣朗氏指導の碩士論文、陳藻香氏「野上弥生子の台湾認識」(1991,6)が、ほぼ全体に亘って注釈し誤記も多く指摘しているが、台湾国家図書館所蔵の雑誌掲載以前の論文のため、検証・論究されてこなかった。渡邊は2013年に野上の訪問地のうち数箇所を訪れ、一部の現地調査と文献調査を行った。花蓮・大武・桃園で、野上が面会したアミ族公学校教師坂田基明(李基明)氏の次男李文成氏、パイワン族公学校教師嘉茂君子氏の長男許幸雄氏、その他の関係者に聞き取り調査を行い、その後坂田基明氏の次女李益秀氏より書簡を得て、「1935年の台湾と野上弥生子 花蓮・大武の公学校教師との出逢い」(2013・8『アジア遊学』)を発表した。
- (2) 野上が得た情報は、ほぼ案内役である官憲側の人間の発言によるもので、未検証であり、かつ偏向が見られ、本作品ではそれを前提に、野上の洞察と批評が展開する。「傍観的立場」と批判される所以であるが、現在公開されている史料や台湾原住民側当事者の証言から検証することで、野上が得た情報の「偏向」の内実、総督府側の「情報」そのものを検証するという課題が残されていた。
- (3) 野上『台湾』は、「認識に限界ある統治側の日本人作家」という視点人物を設定しながら、逆に、その「観察」によって描かれた人物が、偏向した情報を得た視点人物の主観的表面的解釈を超えて、「台湾原住民知識人の苦悩」を読者に暗示するという独特の構造をもつ。このことから、本作品及び日本人作家による日本統治下台湾関連記録・文学には、「作品構造及び文学的表現を通じて表現される台湾認識」分析の余地があると考えられた。

2. 研究の目的

「霧社事件」をはじめ野上が得た情報は、ほぼ案内役である官憲側の人間の発言によるもので、それに拠る野上の批評には偏向が見られる一方、理蕃政策の矛盾を衝く野上の指摘の意味は、再度問われる必要がある。現在公開されている史料や台湾原住民側当事者の証言から検証することで、野上が得た情報の「偏向」の内実、総督府側の「情報」そのものの問題点を指摘できる。同時に、野上『台湾』は、1935年時点の日本側の情報と現地の見聞という検証すべき史料的価値と共に、それとは別次元に文学的表現において、支配側の作家の視点とは相容れない、日本統治下の台湾原住民・本島人の状況描出と心情読解の可能性を有している。それを踏まえ、『台湾』及び台湾関連日本文学について、歴史的考証の上で文学的解釈の可能性を探り、史料的価値と文学的価値の関係性を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 野上『台湾』の記述中、「1、施政四十年博覧会及び記念事業」「2、巴達岡原住民児童に対する日本語教育」「3、花蓮での原住民舞踊と歌謡の記録」「4、阿里山登山」「5、霧社での見聞と霧社事件に関する聞書」に関して、国内外の文献調査及び現地調査を行う。
- (2) 野上が1935年に面会した坂田基明氏・嘉茂君子氏に関する文献調査及び現存する親族への聞き取り調査を行い、そこで得た内容に関して、さらに文献資料により考証する。
- (3) 日本統治期における日本人作家による台湾視察記録・紀行文・小説について、記述された情報・台湾認識等を比較対照し、史料的価値と文学的価値を分析する。

4. 研究成果

台湾総督府総務長官平塚広義夫人茂子の友人という立場のため、野上の原住民の生活見学の要請は、総督府作成の日程による「視察」として実現した。官憲は理蕃政策を肯定する発言を期待したと推察されるが、野上が「原住民の文化保存の必要性」「原住民の経済変化がもたらす結果への危惧」「警察による理蕃が継続することで生じる矛盾」を指摘したことが、文教局河崎寛康の批判を生むことになった。本研究では、台中霧峰林家の林猶龍、花蓮の坂田基明、大武の嘉茂君子など、総督府に選択された面会者に関わる文献を調査し、野上の視察内容を日本統治期の台湾視察に関する記事と対照することで、その訪問地と面会スケジュールが総督府によって厳密に管理され、理蕃政策に沿った見解の公表が期待されていたことを検証した。

- (1) 野上『台湾』の花蓮の記述に関しては、第一に、1935年台湾始政四十年記念事業におい

て花蓮で開催された原住民による舞踊のプログラム内容を調査し、野上『台湾』中に転記された歌詞と『始政四十周年記念台湾博覧会誌』（1939,1）掲載の「高砂族舞踊プログラム」とが、ほぼ一致することを確認し対照した。上記『博覧会誌』において、原住民の伝統的舞踊を「武骨一般の高砂踊」と一括し、日本の舞踊を演目を含む理由を「審美力に乏しい蕃人」の「情操陶冶」とする総督府の姿勢に対して、野上が原住民族伝統文化の保存を主張したことの時代的意義を評価した。第二に、花蓮で野上を薄薄蕃社に案内したアミ族薄薄公学校訓導坂田基明（李基明）について、2016年に次男李文成氏に再度聞き取り調査を行った。『台湾総督府及所属官署職員録』（1935）、黒澤隆朝『台湾高砂族の音楽の研究』（1973,3）に坂田基明の名が記載されることは2013年の調査で確認したが、今回新たに李文成氏執筆の坂田基明に関する資料「一位原住民教育交錯者の成長歷程」を得たことによって、坂田基明が台北師範学校に進学した経緯や日本人教師による影響が具体的に明らかになった。

- (2) 『台湾』中、大武におけるパイワン族頭目カヤマとその一族に関する官憲側の情報と、カヤマの姪嘉茂君子との面談に関して、『台湾日日新報』『台湾時報』『臺灣高砂族系統所属の研究』『東台湾展望』等より文献を収集し整理した。また嘉茂君子の長男許幸雄氏に数度の聞き取り調査を行い、幸雄氏所蔵のカヤマ・嘉茂君子等の写真、幸雄氏が手書き作成した「大武警察署・小学校周辺地図」「大武小学校・公学校配置図」「大島カヤマ居住地周辺地図」を得、さらにその証言を文献によって裏付け、一部修正を行った。
- (3) 霧社・埔里に関する野上の記述に関して、霧社事件の同時代文献における、野上の視察と官憲より得た情報の具体的な特徴を明らかにした。『台湾』は、霧社事件の原因について、元警官「桜旅館主人」の情報として以下の三点を記述する。総督府文書にも記載された出役の苦痛・賃金支払いの遅延に触れず、日本人児童の通う「小学校」を主とする改築であったものを「蕃童の公学校」改築とする。煽動者として、一家を日本側に処刑されたピポワリスには触れず、ピポサツポの妻への執着を語る。理蕃政策と根底で関わる原住民女性と日本警官との結婚破綻による怨恨については、個人的感情としての側面を強調する。霧社で見学が追加された「パーラン社」に関しては、霧社事件の後日談として、パーラン社頭目ワリスブニの盛大な葬儀（1935,1）への息子の欠席を幾分ユーモラスに語る。野上自身、事件が内包する問題点には距離を置き、パーラン社原住民の家庭を訪問して感じた幸福感と、モーナルーダオへの讃美を印象深いものとして記述する。
- (5) 上記(1)「原住民族文化保存の重要性」に加え、野上が「警察による理蕃政策がもたらす矛盾」を指摘したことが、文教局河崎寛康によって「日本帝国の一部としての臺灣の發展」(『台湾時報』1936,2)という目的意識において批判されたことに関して、当時の野上の言説を参照し、1935年当時の理蕃政策下、教育・文化の領域における国粹主義的方針を警戒する自由主義的感性と、現住民文化の学術的意義の重要性を表明した意義を評価した。一方、『台湾』における野上の原住民観には、無自覚的な優越意識とエキゾティシズムが含まれている。1930年訪台し『新台湾行進曲』及び講演において台湾の社会問題に関して発言し、林献堂や林攀龍と深い交流のあった北村兼子、原住民と居住し、第一霧社事件から川中島移住までを視野に被支配者と支配者の民族的アイデンティティを問い続けた阪口禰子と比較すれば、設定された一度の面会による印象を記した野上の考察は、表面的で偏向も有しているが、以下の点で評価しうる。第一に、与えられる情報・発表しうる内容とともに統制された状況下において、「討伐その他武力警察権により、教化の基礎を作った」今後「改めて文明へ導く教育を開始する」ところに「新たな困難に直面する」という野上の指摘（河崎による引用）は、理蕃政策の根幹を衝く批判であったことである。第二に、『台湾』の語り手が語り手「野上」の原住民への優越意識による人間洞察の限界を示しながらも、原住民族知識人の描写がその視点を超え、日本統治下に公学校教師として生きる原住民族知識人の複雑な心情を読者に窺わせる点である。本研究で、面会者として選ばれた花蓮の公学校教師坂田基明（アミ族）は、苦学して台北の師範学校を卒業してアミ族文化の保存・紹介に努めていたこと、パイワン族頭目カヤマの姪、嘉茂君子は台湾愛国婦人会役員であり、後年我子に日本語での厳格な躰をする人物であったことを確認した。野上の描写は、その生を反映すると同時に、野上自身の偏見による誤認も含むという、植民地支配下において人間を描くことのきわめて微妙な揺れを表している。第三に、1942年の時点で、霧社事件におけるいわゆる「味方蕃」のパーラン社ではあるが、霧社の原住民家庭を情愛を込めて描写した点である。当初総督府側は、埔里の役場で整列した霧社蕃の男達に訓示を与える場面と、事件現場のみを見学地として予定したのに対して、野上が時間延長を要望し、パーラン社の家庭生活を記録・発表しえた意義は大きい。
- (6) 上記の他、『台湾』関連の訪問地、人物に関する調査を行った。台南市立図書館蔵『台南第二中学校校友会雑誌』中、嘉茂君子の夫許両家氏に関する記事を確認し、野上が台南で面会した明治女学校時代の旧友呉笑について、『台湾日日新報』等によって、留学時・卒業後の状況が明らかになった。また、阿里山登山の記述を、雑誌『台湾の山林』等の山岳雑誌

をはじめとする関連文献によって検証した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

渡邊ルリ、野上弥生子『台湾』における花蓮、東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要、査読有、第14号、2017,3、65 - 78)

渡邊ルリ、野上弥生子『台湾』における大武 - 日本人作家の視察と「頭目カヤマの一族」 - 、ASIA 社会・経済・文化、査読無、第5号、2019,3、東大阪大学アジアこども学科、148 - 176

〔学会発表〕(計2件)

渡邊ルリ、野上弥生子『台湾』の視座 日本人作家の視察と理蕃政策、日本近代文学会関西支部秋季大会、2018、単独

日本統治期台湾の日本語文献、5 科研連合研究集会「東アジアにおける日本語資料 外地文化研究の現在」、2018、単独